

前期

文系

平成 30 年度入学試験学力検査問題

地理歴史・数学

〔人文社会学部、経済経営学部：経済経営学科 一般区分、
都市環境学部：都市政策科学科 文系区分

90分〕

答案用紙

- ・日本史 3枚
- ・世界史 2枚
- ・地理 3枚
- ・数学 2枚

注意

1. 監督員の合図があるまで、問題の内容を見てはいけません。
2. 数学は、筆記用具のほか定規、コンパスの使用を認めます。
ただし、分度器の使用は認めません。
3. 受験番号及び氏名は、答案用紙の所定欄に必ず記入してください。

(例) 受験番号 1234567X の場合

		1	2	3
4	5	6	7	X

4. 解答には黒鉛筆またはシャープペンシルを使用し、必ず配付された答案用紙に記入してください。なお、世界史、数学は裏面にも解答欄があるので注意してください。
答案用紙には、解答に関係のないことを記入してはいけません。
5. 字数指定の設問で解答欄にマス目が用意されている場合、アルファベット及び数字は、1マスに2字記入しても構いません。
6. 問題は次に示したページにあります。
 - ・日本史 1ページ～7ページ
 - ・世界史 8ページ～15ページ
 - ・地理 16ページ～26ページ
 - ・数学 27ページ～28ページ
7. 試験中に不鮮明な印刷等に気付いた時は、手をあげて監督員に申し出てください。
8. 答案用紙を切り取ったり、持ち帰ったりしてはいけません。
9. 問題冊子の余白は利用可能ですが、どのページも切り離してはいけません。
10. 問題冊子は、持ち帰ってください。また、試験終了時刻まで退室できません。

物 本 目

1. 物 本 目 目 録

2. 物 本 目 目 録

3. 物 本 目 目 録

4. 物 本 目 目 録

5. 物 本 目 目 録

6. 物 本 目 目 録

7. 物 本 目 目 録

8. 物 本 目 目 録

9. 物 本 目 目 録

10. 物 本 目 目 録

11. 物 本 目 目 録

12. 物 本 目 目 録

13. 物 本 目 目 録

14. 物 本 目 目 録

15. 物 本 目 目 録

16. 物 本 目 目 録

17. 物 本 目 目 録

18. 物 本 目 目 録

19. 物 本 目 目 録

20. 物 本 目 目 録

21. 物 本 目 目 録

22. 物 本 目 目 録

世界史

1 次の文章を読んで、以下の問い(1～4)に答えなさい。

中国の農耕文明は、前6000年ごろ、黄河と長江の中・下流域を中心に発生した。前3千年紀には、黒陶を特色とする [a] 文化の拡がりに見られる地域間交流の緊密化や、集落の大規模化が進み、相互の紛争を引き起こしつつも、各地域の政治的統合が促された。とりわけ黄河中・下流域では、城壁に囲まれた都市(邑)が発達し、やがてこれらを統合する広域的な王朝国家が成立した。

現在確認できる最古の王朝である殷は、こうした諸邑の連合体の盟主的性格を持っていた。王は、最高神「帝」の祭りを盛大に挙行し、 [b] で神意を占い政治運営を行うなど、強大な宗教的権威で多数の邑を従えた。渭水盆地を本拠とする周は、そのうちの有力な邑の一つであったが、次第に勢力を増し、前11世紀に殷を滅ぼした。⁽¹⁾

周は [c] に都をおき、殷と同様、諸邑の盟主として君臨した。周王は、一族・功臣などに領地(封土)を与え世襲の諸侯として支配を認めた。また周王や諸侯は、家臣である卿・大夫・士にも封土を与えた。土地の分与を媒介とするこうした周の統治方法を封建(制)という。⁽²⁾

前770年、犬戎の侵入を受け、周は東の [d] に遷都した。周王の権威は失墜し、諸侯は自立の傾向を強めた。以後、始皇帝の秦による統一まで、中国では分裂と抗争の時代が続く。この時代の前半の春秋時代には、有力諸侯が周王の権威を借りて同盟を呼びかけ、盟主となって主導権を握った。こうした有力諸侯を [e] という。続く戦国時代には下剋上の風潮が広まり、諸侯は周王を無視して王を自称し、諸国間の抗争が一層激化した。小国の併合が進んだ結果、 [f] と呼ばれる七大国が出そろい、互いに同盟を結び、勢力争いを展開することとなった。

こうした競合のなか、春秋・戦国時代には政治・経済・社会が急速に変化した。⁽³⁾ 激動の時代のなかで、新たな社会秩序のあり方が模索され、 [g] と総称される多くの思想家たちが現れた。

問 1 空欄 a ~ g に適切な語句を入れなさい。

問 2 下線部(1)について、孟子がとなえた王朝交替の理論の名称を答えなさい。

また、その理論の内容を、以下の4つの語句すべてを用いて70字以内で説明しなさい。使用した語句には下線を引くこと。

(語句) 天子 天命 禪讓 放伐

問 3 下線部(2)について、封土を与えられた見返りとして諸侯が周王に課された義務を2つ記しなさい。また、周の封建制の特徴について、西欧の封建的主従関係と比較して40字以内で説明しなさい。

問 4 下線部(3)に関連して、春秋時代中期以降には、農業技術の革新が起こった。この農業技術の革新とそれ以前の農業技術との相違について述べ、その革新が農業経営のあり方と、従来の周の社会秩序のあり方に及ぼした影響について、90字以内で説明しなさい。

2 次の文章を読んで、以下の問い(1～5)に答えなさい。

紀元後1世紀に成立し広まっていったキリスト教は、4世紀のローマ帝国において無視できない存在になる。4世紀初頭、帝が主導する大迫害を経て、313年に、コンスタンティヌス帝によって公認された。彼は教義論争にも関心を寄せ、自らが招集した公会議では教義の統一が図られ、派が正統とされた。⁽¹⁾4世紀半ばのユリアヌス帝のもとでは伝統的多神教の復興が試みられたが、4世紀末、帝は派キリスト教を国教とした。

395年、ローマ帝国は東西に分裂した。同じ頃、ゲルマン人の大移動が始まり、そのうちの一派は410年に都市ローマを一時占領した。こうした出来事については、「ローマ人が伝統的な宗教を捨て去りキリスト教を受け入れた罰」⁽²⁾とらえる見方も存在した。このゲルマン人の大移動の一因として考えられるのが、中央アジアから西進してきたフン族である。5世紀半ばに王のもとに統一されたフン族は西ヨーロッパに軍を進めるものの、西ローマ帝国とゲルマン人の連合軍に敗れた。

476年、ゲルマン人の傭兵隊長が皇帝アウグストゥルスを退位させ、西ローマ帝国は消滅したが、すでに西ヨーロッパ各地にはゲルマン人諸王国が成立しつつあった。こののち、フランク王国は力をつけていったが、これは王がローマ教会の教義を受け入れて改宗し、ローマ人貴族層の支持を得たためであった。

6世紀になると、東ローマ(ビザンツ)帝国はユスティニアヌス帝の治世下でローマ帝国領の回復を⁽³⁾試みた。東ローマ帝国は、ゲルマン人国家のうち北アフリカのとイタリアのを滅ぼし、地中海の再統一を果たした。しかし、その成功も一時的なものであった。⁽⁴⁾

問 1 空欄 a ~ h に適切な語句を入れなさい。

問 2 下線部(1)について、公会議の名称と、そこで異端とされた教義の概略を 25 字以内で説明しなさい。

問 3 下線部(2)の見方に対して、反論をした著作の名と、その著者であるキリスト教聖職者の名を記しなさい。

問 4 下線部(3)に関連して、この皇帝の内政面での活動を 50 字以内で説明しなさい。

問 5 下線部(4)について、ユスティニアヌス帝の死後から 7 世紀末までの東ローマ帝国の動向を、以下の 4 つの語句をすべて用いて、140 字以内で説明しなさい。使用した語句には下線を引くこと。

(語句) ランゴバルド ササン朝 イスラーム 軍管区制

3 次の文章を読んで、以下の問い(1～4)に答えなさい。

ヨーロッパにおいて、中世末期から、教皇を頂点とするカトリック教会の権威は、揺らいでいた。教皇による世俗の政治への干渉や聖職者の墮落が批判の対象となる中で、ドイツのヴィッテンベルク大学の神学教授マルティン・ルターは、1517年に を発表して、ローマ教会と教皇を痛烈に批判した。これが宗教改革の始まりである。以後、彼は、カトリック教会との論争を通じて、信仰の基礎は『聖書』のみにあり、人は信仰によってのみ神に救われると主張して、教皇の権威を否定した。教皇庁は、ルターの破門を宣告し、当時の神聖ローマ皇帝 も教皇側に与した。しかし、ザクセン選帝侯をはじめとするドイツの領邦君主や帝国都市の支援をうけ、ルターは『新約聖書』のドイツ語訳を行って、宗教改革を進めた。

ルターの改革を支持する動きは、ドイツ各地に広がり、万人が神の前に平等であるという彼の主張に支えられて、1524～25年に、西南ドイツでドイツ農民戦争⁽¹⁾が起こった。しかし、ルターは、諸侯寄りの態度をとり、農民たちを失望させることになった。ルター派の諸侯と帝国都市は、1530年にシュマルカルデン同盟を結んで、皇帝 に対抗した。彼らは1555年に成立した により、カトリック教会とルター派のいずれかを選ぶことができるようになったが、領民個人に選択の自由はなかった。

スイスでは、1519年に が、チューリヒで宗教改革に着手し、その後、フランスの人文主義者カルヴァンが、ジュネーヴで独自の宗教改革を行った。カルヴァンは、魂の救いはあらかじめ神の意志によって決定されているという を説いた。禁欲と儉約を旨とするその合理的な職業倫理観と相まって、彼の教義は、西ヨーロッパの商工業者の間に広く受け入れられていった。カルヴァン派は、16世紀後半には、フランス・ネーデルラント・イングランド・スコットランドなどに広まり、新教徒(プロテスタント)という言葉は、ルター派と共に、カトリックに反対する宗派の総称となった。

宗教改革の進展に直面したカトリック教会側は、教皇の首位権を主張しつつ、教義の明確化と教会内部の道徳上の刷新をめざした。対抗宗教改革と呼ばれるこ

の運動は、1534年のイエズス会の設立や、1545年から1563年にかけて開かれた

(2) によるカトリックの教義の再確認などにより、カトリック教会の勢力

の回復に貢献した。

宗教改革は、カトリック教会の普遍的権威を動揺させ、カトリック教徒と新教

徒の対立の激化をもたらし、ヨーロッパ各地で宗教戦争を引き起こしたが、同時

(3) に台頭する世俗権力のイニシアティブの下で、近世の主権国家が形成される重要

な契機をなした。

問 1 空欄 a～f に適切な語句を入れなさい。

問 2 下線部(1)について、この戦争における農民側の主張とそれに対するルターの
見解について、70字以内で説明しなさい。

問 3 下線部(2)について、この団体の活動について、以下の5つの語句をすべて
用いて160字以内で説明しなさい。使用した語句には下線を引くこと。

(語句) ザピエル、マテオ＝リッチ、ロヨラ、
ゴア、坤輿万国全図

問 4 下線部(3)について、フランスで16世紀後半に起こった宗教戦争を終結さ
せた1598年の王令の名称を記し、その内容について、60字以内で説明しな
さい。

4 次の文章を読んで、以下の問い(1～5)に答えなさい。

イギリスでは18世紀、当時爆発的な人気を博していたインド産綿布を自国で生産したいという動機と、生産技術やエネルギー源の革新により、綿工業が発展し、やがて国外への輸出も増大した。原料となる綿花は、当初は大西洋の三角貿易⁽¹⁾の一角である西インド諸島やアメリカ大陸から、後にはインドから輸入された。

18世紀後半に独立を果たしたアメリカ合衆国では、1812年の米英戦争により⁽²⁾イギリス工業製品の輸入が途絶えると、北部を中心に工業化が進展した。一方南部では、による綿織り機の発明を背景に綿花生産が盛んになっていた。こうした経済構造の相違に起因する対立は、の原因の一つとなった。

インドでは、イギリス産の機械製綿布が流入して、1810年代末には綿布の輸出入が逆転した。その結果、インドの主要輸出品はイギリス向けの綿花・藍・麻・コーヒー・茶、中国向けのなどとなった。1858年、イギリスはそれまでインド統治を担っていた東インド会社を解散して直接統治を行うこととし、1877年、⁽³⁾を成立させた。19世紀後半、インドのイギリスへの経済的従属が進展する一方で、軽工業を中心に民族資本家の成長が見られた。また近代的な学校教育を受けた知識人も増加し、1885年、こうした人々を中心にインド国民会議が結成された。当初は穏健姿勢であった国民会議はしだいに反英傾向を強め、1906年のカルカッタ大会ではベンガル分割令に反対し、英貨排斥⁽⁴⁾・・民族教育の4綱領を決議することでイギリスへの対抗姿勢を明確にした。

問 1 空欄 a ~ f に適切な語句を入れなさい。

問 2 下線部(1)を 80 字以内で説明しなさい。

問 3 下線部(2)の原因を 60 字以内で説明しなさい。

問 4 下線部(3)の原因となった事件の名称を答えなさい。

問 5 下線部(4)について、ベンガル分割令の内容とイギリスの意図について 90 字以内で説明しなさい。

